

災害を経験した 私たちがだから

7月豪雨により被災した大分県日田市等の被災状況の調査のため、職員2人を派遣しました(7月20～24日)。本市と大分県日田市とは災害時相互応援協定を締結しています。

今回の派遣は、日田市と熊本県内の被災状況の把握と避難所の運営状況等の調査を行い、今後どのような支援が必要かを把握することが目的です。

24日には、調査を終えた職員から、国・県等の支援が円滑に進められており、現時点では、協定に基づく支援は必要ないとの報告を受けました。一刻も早い、復旧を願っています。

《問合せ》防災課 ☎23-11111



▲7月20日防災公園にて派遣職員を激励する中貝市長

水害・土砂災害に備えた 地域防災を考える

7月19日、八条コミュニティで防災ワークショップが行われました。これは、本市が国土交通省、県、豊岡市社会福祉協議会と連携して、地域の防災力向上を目的に開催しているものです。当日は地域の防災上の課題等を確認し、防災課からの災害・防災に関する情報提供の内容を基に、5班に分かれて避難場所、避難対象者、避難のタイミングなどを話し合い、行政区避難計画シートに取りまとめました。

地区住民の自主防災意識の向上が安全安心な地域コミュニティに繋がります。

《問合せ》防災課 ☎23-11111



▲安全を確保するための多様な避難方法を再確認する住民の皆さん

市政 ニュース

〈主な市政の動き〉

〔7月〕

- 11日・たけのサマーバス運行開始(～8月23日)
- 15日・7月豪雨義援金募金箱の設置(～8月31日)
- 17日・豊岡市空家等対策協議会の設置
- 20日・豊岡市行政改革委員会
- 被災地・大分県日田市等への職員派遣(～24日)
- 22日・豊岡市地方創生戦略会

議

- ・豊岡市環境審議会
 - 23日・とよおかアート緑日
 - 25日・植村直己冒険賞授賞式、記念講演会
 - 30日・「豊岡演劇祭2020」公演スケジュール等発表会
- #### 〔8月〕
- 1日・新型コロナウイルス感染者発生
 - 8日・市立小学校夏季休業短縮(～18日)



※掲載している情報は編集時点(8月12日)のもので、変更になっている場合がありますので、注意してください。

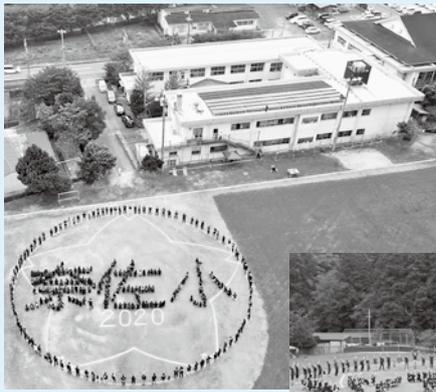
奈佐小学校で

『人文字撮影会』を開催

8月2日、奈佐小学校のグラウンドで、同校の統合にかかる記念誌の制作イベントとして人文字撮影会が開催されました。

これは、奈佐地区で組織する「奈佐小統合準備委員会」の呼びかけにより行われたもので、当日は朝早くから、300人を超える区民等が訪れ、一斉ラジオ体操のあと、『奈佐小』の人文字を作り上げました。

《問合せ》教育総務課 ☎23-11117



▲ドローンで撮影された「奈佐小」の人文字



心が震えるアート体験を

お届け

新型コロナウイルスの感染の余波を受けた子どもたちに元気を取り戻してもらうため「**り豊岡**」の取組みの一環として「**THEATER豊岡**」と銘打ち、たくさんの方のアート体験を通じて他者と共感する心を育むなど、子どもたちの感性を高める機会を提供しています。内容は、市内の小学校、保育園・幼稚園・こども園訪問による演劇公演や江原河畔劇場、城崎国際アートセンターでの子ども向け公演、演劇ワークショップ、市内各所での大道芸人、知念大地さんの公演(全て無料)などです。

さあ幕開けです、子どもたちの笑顔が見たいから。

《問合せ》大交流課 ☎21-9081



▲光と闇で描く美しくポップな童話の世界

中貝市長の徒然日記 ⑭

感染者を叩かないで

この原稿を書いている時点で市内で感染が確認された方は、お一人です。この徒然が皆さんのお手元に届く頃、まじがどんな状態になっているのか想像もつきませんが、改めて、感染者を非難しないで、お願いしたいと思います。

専門家は、感染者を叩くことは、自分で自分の首を絞めることになる、と言っています。理由は二つあります。

一つは、誰でも感染する可能性がある、ということ。ウイルスは、人格や道徳的行動の有無を見て取りつくわけではありません。患者を守ろうと全力を尽くす献身的な医師や看護師にだって取りつくことがあります。

自分自身が感染し、自分や家族が口汚くののしられる姿を思い浮かべてみれば、それがどんなに理不尽なことか、容易に想像できるはず。正義感を振りかざして感染者を責める刃が、今度は自分自身に降りかかってくる。

もう一つは、感染者を叩く風潮が広がると、感染者が自分の立ち寄った場所や出会った人などの感染経路を隠してしまい、感染拡大防止が困難になる、ということです。それは結局、ブーメランのように私たちに災いとなって帰ってきます。

感染した人も、多くは治療して家族の元に、地域の中に戻ってきます。そのとき、傷つけ合った家族や地域はどうなっているでしょうか？

コロナ騒動もやがていつか収束します。そのとき、「互いに力を合わせ、励まし合って、ここまでよく乗り切ってきたなあ」と皆で肩をたたき合うのか、それとも、気まぐれ目をそらし合うのか。それが問われているのです。

不運にも感染し、不安の中にいる人に対し、人として私たちがなすべきことは、励め、励まし、一日も早い快復を願うことだと思えます。敵は、人ではなく、ウイルスです。

コロナ収束後も、私たちは互いに良き隣人であり続けたい、と強く願っています。